道南ドクターヘリ10周年を迎えて

浅井　康文[1)2)]、白崎　修一[3)]

雄心会函館新都市病院名誉院長[1)]、道南ドクターヘリ運航調整委員会委員長[2)]、北海道医師会常任理事[3)]

はじめに

北海道で４機目の道南ドクターヘリは2015年２月16日に運航を開始し、2025年２月に就航10周年を迎えた。市立函館病院（森下清文院長・道南ドクターヘリ基地病院）が主催で、２月19日に函館国際ホテルで記念式典が行われた。

森下清文・市立函館病院長の開会の挨拶の後、鈴木直道・北海道知事（代理：人見嘉哲・北海道保健福祉部技監）、大泉潤・函館市長、松家治道・北海道医師会長から、祝辞をいただいた。

10年の歩み

市立函館病院・武山佳洋救命救急センター長

オール道南として、道南圏医療機関・消防機関・自衛隊などと協力と支援のもと、奥尻や山間部などを含めて、道南ドクターヘリの10年間の出動は約4,000件であった。札幌医科大学救急医学講座（成松英智教授）からは、医師派遣をいただいている。格納庫の賃借料、機材リース料などに必要な「基盤的経費」と、搭乗医師・看護師確保経費や医療資材費にかかる「運航関連経費」で国・道の補助金で賄えない分を、道南18の市と町が利用割合に応じて負担しているのが特徴の一つである。消防のランデブーポイントは2025年１月現在で302か所である。2024年度より基地病院の市立函館病院の屋上からの直接出動ができるようになり、救急現場までの飛行時間の短縮が期待されている。2025年度は原則として４～11月の予定となっている。2024年度の出動件数は12月末現在で272件と、道内４基地病院で最多である。事例として、①上ノ国町でミキサー車と乗用車が正面衝突した交通事故では、ドクターヘリで現場から病院まで患者を迅速に搬送できたこと、②七飯町での山中で行方不明の７歳男児のドクターヘリ出動で救出に赴いたこと、③八雲の交通事故で、本邦３例目の先進事故自動通報システム（AACN）でドクターヘリとの連携があったことを振り返られた。今後も道南の皆さんから愛されるドクターヘリを目指していきたいと結ばれた。

記念講演会

函館市病院局・氏家良人病院局長が座長をされた。

１　鹿児島市立病院・吉原秀明救命救急センター長

2011年12月から鹿児島県ドクターヘリ事業の基地病院、2014年10月からは鹿児島市が運用開始したドクターカーの基地病院として活動している。鹿児島県は、南北約600kmに渡る海域に本土・僻地・離島と様々な地域を抱えた県であり、鹿児島県全域および隣接する宮崎県や熊本県との連携でドクターヘリにて病院前救急医療を行っている。また鹿児島市内では鹿児島市消防局から委託される形でドクターカーにて病院前救急医療に貢献している。さらに、災害医療を支える「基幹災害医療センター」、「DMAT指定医療機関」としての役割がある。交通事故などの外傷患者を一刻も早く搬送したい意味での、ヘリコプター選定へのこだわりも言及された。

２　レオナルドヘリコプターズ営業部・面高真理男極東アジア統括部長

１秒でも早くという視点から、イタリアのレオナルド社が開発する民間用ティルトローター機（AW609）を紹介された。巡航速度は最大時速510キロメートル、航続距離は通常の燃料タンクで1,389キロメートル、増槽タンク装備で1,852キロメートルと、通常のヘリコプターの２倍の巡航速度と航続距離があり、離島へのアクセスでの活用を模索している。滑走路が短くて良いことも利点であると紹介された。

３　日本航空医療学会・小濱啓次監事

厚生労働省ドクターヘリ導入促進事業であるドクターヘリについて、特別発言があった。多数のドクターヘリによる救命医療が、事故や災害医療において１件の死亡事故もなく、毎日安全に運航されていることは、世界的に見ても稀なことであり、この成果は多くの関係者の努力と検証によって実現していると述べられた。2025年に「改訂　ドクターヘリ：救急医療用ヘリコプターの現状と救命医療システムのこれからを考える」が出版されたことも、紹介された。

終わりに

道南ドクターヘリの開始に当たっては、当時の吉川修身・函館市病院局長、故木村純・市立函館病院長、伊藤丈雄・函館市医師会長などのご尽力があった。また道南ドクターヘリ運航調整委員会では、目黒順一・北海道医師会常任理事や、大原正範・函館市医師会長からは常にアドバイスをいただいた。市立函館病院ほか道南関係医療機関、函館市医師会、運航会社の鹿児島国際航空、また関係者の皆様と共に歩んだ10年で、初期の運営に関わった皆様も世代交代が進んでいる。道南は、駒ヶ岳の噴火、北海道南西沖地震、東日本大震災などを経験しており、大泉潤・函館市長が述べられたように、今後の災害での道南ドクターヘリの役割は重要である。道南ドクターヘリのさらなる発展を期待したい。